

## 2年間の振り返り

【Think globally, Act locally. Think locally, Act globally】

独立行政法人 国際協力機構 JICA  
ウズベキスタン国立児童社会適応センター  
びわこ学園医療福祉センター草津 理学療法士 大西 海斗

Japanese: たくさんの笑顔で私を救ってくれた子どもたち、心を開いてたくさんのことを教えてくれた彼らの家族、そしていつも支えてくれたスタッフに心から感謝いたします。

English: I deeply appreciate the children who saved me by their beautiful angelic smile, their family who opened their heart and taught a lot of things to me and our staffs who always supported to me.

Uzbek: Мен ўзларининг чиройли табассумлари билан мени асраган болалар ва юракларини менга очиб, кўп нарсалар ўргатган уларнинг оилаларига ва ҳардоим қўллаб-қувватлаган ходимларга миннатдорчилигимни билдираман.

2017/12/20



2016年1月滋賀県を発ち、ウズベキスタンに赴任しました。任期終盤となった今、改めて JICA ボランティアにおける経験を振り返りたいと思います。

赴任当初、右も左も分からないまま、ただただ“ウズベク語”と“ロシア語”を学ぶ1ヶ月でした。首都タシケントは道も建物も美しく、開発途上国なのか、はたまたボランティアが必要なのか、

そう錯覚するほどでした。

2月になり、配属先である東の地域フェルガナ州に移動し、障害児のリハビリセンターに配属となりました。現地のスタッフはボランティアを受け入れることも初めて、日本人と会うことも初めて、そんな方ばかりでした。当然、私もウズベク語がままならないながらも活動が始まりました。特に医療用語や専門用語はロシア語が多く、スタッフや子ども(家族)に「説明できない」どころかカルテも読めない、書けない、そんな状況だったことを思い出します。

そして、「3ヶ月は試用期間。使えなかったらあなたはいらぬ。」ボランティアでありなが

ら、そう言われての厳しいスタートでした。

その後、暗く寒い冬が終わりを迎え、日本の桜によく似た「杏」の花が咲き誇ります。この頃からリハ室で1日40人以上の子どもたちを診る怒涛の日々が始まります。赴任して3ヶ月ほど経つと、良くも悪くも色々な側面を目の当たりにするようになってきました。宗教や教育、医療システムなど様々な文化の違いから戸惑いや葛藤も多くなりました。



夏には50℃という気温を経験し、人々の生活にもたらす気候や環境の影響について考える機会をいただきました。日本では考えることもなかったことかもしれません。そして、ちょうどこの時期はいわゆる“大きな壁”にぶつかっていた時期でした。

“日本や最先端と呼ばれる医療が全てではない。  
その国の文化から、その人に合わせたものを。”

頭では分かっているつもりでも、何をやっても空回り、心に余裕もなく、ウズベク語を聞くことさえも嫌なほど苦しい3ヶ月間でした。そして、何よりそんな自分が悔しくて、ウズベキスタンの方たちに申し訳ない気持ちとが負のループとして「ぐるぐるぐるぐる・・・」。

しかし、そんな時に支えてくれたのはやはり子どもたちでした。職場に行くと「Kaïto(Kaïto), Kaïto !!」と、屈託のない笑顔で迎えてくれる子どもたち。自分には何が



できるのか、テクニックや日本の医療、表面上の知識だけを伝えることがベストではないこと、そして自分にやれること、最低限やるべきこと、やってはいけないこと、そんなことを何度も何度も自問自答し、少しずつ明確になっていきました。

任期後半になると、スタッフ間で互いの意見交換や相談しながら、活動していけるようになりました。後半ともなると、今まで自身で企画していた

セミナーや講義も依頼してもらえるようになり、少しずつ伝えたいことを伝えられる機会が増えて行きました。第11回北京国際リハビリテーションフォーラムでは、「ウズベキスタンのリハビリテーションの現状と課題」に関して発表し、他国との情報交換など貴重な経験をさせていただきました。2年間かけて作製してきたウズベク版母子健康手帳に関しては、単なる作製・冊子で終わらぬよう普及に向けてJICAやウズベキスタン保健省にご協力いただいています。今後、さらに母子保健分野の課題解決の一助になることを願っています。

「なぜわざわざ外国に行くんだ。  
日本で働いて、先端的な医療を学ぶ方がいいじゃないか。  
お前に外国で何ができるんだ。」

そういった厳しい声もいただきました。正直、悔しい思いをしたこともあります。しかし、この2年間で得たもの、経験したこと、考えたことは何にも代え難いものがあります。日本の中だけでは見えてこなかったもの、知っているつもりだったこと、むしろ途上国と呼ばれる国から逆輸入できる考えがたくさんあること。多くのことを学び、自分と向き合う機会がありました。身ぐるみが剥がされていくような、辛く苦しい自分との戦いでもありました。今までこんなにも色々な視点から考えたことはなかったように思います。ウズベキスタンという国のこと、歴史や世界情勢、インフラや健康状態、食事、教育、イスラム教・・・上げればきりがありません。しかし、



“(スペシャルニーズを持つ)  
子どもたちの  
「らしさ」を広げる  
「可能性」を広げる  
「居場所」を広げる”



という自分の考える理学療法士としての役割は、この国でも大事な  
ことだったと再確認でき、さらにはその考えを深め、広げることが  
できたと思います。

これは、やはり2年間で関わったたくさん子どもたちが教えてくれたことでした。

そして先日、在ウズベキスタン日本国大使館から大使が配属先に訪問してくださり、ウズベキスタンでの障害児領域における現状や私の活動についてゆっくりお伝えすることができました。帰国後もこの2年間の経験を、そして大好きになったウズベキスタンのことを滋賀県を始め、多くの方にお伝えし、還元していければと思っています。

最後に、世界情勢が不安定な最中、無事に生きて帰国できること、そして日本から送り出してくださった皆さま、いつも心配と応援をしてくれた家族に心から感謝いたします。





[最後に…]

ウズベキスタンで願い続けてきたこと。  
それは、お母さんや子どもたちの心が少しでも、  
一時でも解放されること。…何からか。  
他人の目であり、目には見えない社会の目。  
医療的な治療もちろん大事。  
だけど、そのもっとも根底にあるもの・・・  
何を偉そうに、と思われるかもしれないけど、  
自分が肌身を持って感じた現実。  
初めて来た時から感じていた直感であり、違和感。  
ウズベキスタンで公園や遊園地など、  
外出することへのハードルはまだまだ高い。  
本当に、想像以上に。



そんなある日、「Kaito,一緒にパークに行こう!!」と誘ってくれた。すごく嬉しかった。  
公園ではジロジロ見られもした。だけど、声を掛け、乗り降りを手伝ってくれる人も現れた。  
ものすごくシンプルなはずなのに、とても難しいこと。ここに映るのは、  
2年間で関わった1200人の子どもたちのほんの一部。そして、1200ある中のひとつのエピソード。  
外に出ることが全てではないけど、少しは力になれたかな。お偉いさんたちにではなく、  
日々子育てをしているお母さんやお父さんに。そして子どもたちに。届いてくれるといいな。